

新木戸麟編  
 小學修身誦讀書  
 五

175  
 7  
 290

大日本教育書館				東
冊	一 二	一 號	一 架	一 八 函
				3
				新書門

K110.1  
 69  
 5

新撰

小學修身誦讀書五

緒言

一 此卷充小學初等科第三年後期生修身科誦讀之用也。

一 聖賢之教無一言一句不是入德門戶。然使童蒙聞之則未俄易會得者。往往有之。故此書務取易解易諳之語以編之。其章法如左。

- 第一章 三德
- 第二章 忠實
- 第三章 孝

新撰小學修身誦讀書五 卷之五 金華堂

道 第四章 思念 第五章 虛受 第六章

日新 愛日 第七章 治性 第八章 上達

第九章 執中 敬義 第十章 仁義

明治十六年五月

編者誌

撰新小學修身誦讀書五

木戸麟編纂

第一章 三徳

中庸

○天下の達道五つ、之れを行ふ  
所以の者三つ、曰いく君臣あり、  
父子なり、夫婦あり、昆弟なり、朋  
友の交りなり、五つの者ハ、天下

上朱子文  
章句

の達道あり、智仁勇三つのもの  
い、天下の達徳あり、之れを行ふ  
所以の者い一なり、

○知い此れを知る所以あり、仁  
い此れを體する所以あり、勇い  
此れを強むる所以あり、一い則  
誠のこゝ

中庸

上朱子文  
章句

○學を好むい、知に近く、行ひを  
力るい、仁ふ近く、恥を知るい、勇  
ふ近く、

○此れ未、達徳ふ及ばずして、以  
て徳に入ることを求るの事を  
言ふ、

孔子

○知者い惑はず、仁者い憂へず、

朱上文集註

勇者ハ懼れず、

○明ハ以て理を燭きに足れり、故に惑ハず、理ハ以て私に勝つ小足れり、故に憂へず、氣ハ以て道義小配さる小足れり、故小懼れず、此れ學の序なり、  
○知仁勇ハ學の要なり、

程子

朱子

○學に進むに知を以て先きと爲す、

同上

○學を爲して進まざるハ只小是れ勇まざればあり、

第二章 忠實

伊訓

○下と爲て、克く忠、

孔子

○臣、君小事る小忠を以てす、

程子

○已を盡むを忠と謂ふ  
 ○問、忠は是れ實心人倫日用皆當さ小之れを用ふべし、何ぞ獨君小事ふる小於て説くや、朱子の曰いく、君臣は是れ義を以て合ふ世の人、便苟且を得易し、故に此に於て、忠を説く、是れ足ら

陽城

ざる處小就きて説くあり  
 ○凡學者は、忠と孝とを爲ることを學ぶ所以あり、

第三章 孝道

詩 蓼莪

○父也、我れを生み、母也、我れを鞠ふ、我れを拊て、我れを畜ひ、我れを長あし、我れを育し、我れを

顧み、我れを復ふし、出入小我れを腹けり、之れ小徳を報んと欲する小、昊天極り罔し、

傳 朱上子文

○言ナリい、父母の恩此の如し、之れ小報ふる小徳を以てせんと欲して、而して其の恩の大なること天の窮り無き、如く、報を爲

曾子

を所以を知らざるあり、

○孝子の、老を養ふ也、其の心を樂ましめ、其の志小違はず、其の耳目を樂しめ、其の寢處を安し、其の飲食を以て、之れを忠養す、○孝子の深愛有る者い、必和氣有り、和氣有る者い、必愉色有り、

祭義

陳氏  
上文  
解釋

愉色有る者ハ、必婉容有り、孝子  
ハ、玉を執るか如く、盈るを奉る  
る如し、洞洞屬屬然として、勝へ  
弗るる如く、將小之れを失んと  
するの如く、嚴威儼恪ハ、親に事  
ふる所以に非ず、成人の道なり。  
○和氣愉色婉容ハ、皆愛心の發

揚子

是る所、玉を執るの如く、盈るを  
捧ぐる如く、勝へ弗るの如く、之  
れを失いんとするの如きハ、皆  
敬心の存する所なり、愛敬兼ね  
至るハ、乃孝子の道あり、  
○父母に事へて、自足らざるこ  
とを知る者ハ、其れ舜ハ、得て久



陳撰  
上解

うま可らざる者ハ親に事ふるの謂ひあり、孝子ハ日を愛めり、  
○日を愛むとい、此の日の過ま易きを惜み、後日の多きこと無くして、久しく、其の親小事ふるを得ざることを懼るあり、

洪範

第四章 思念

○思ふふ、睿と曰ふ、睿ハ聖と作る、

上文  
蔡傳

○睿とい、微ふ通まるあり、聖とい、通せざること無まなり、

多方

○惟聖も、念ふこと固ければ、狂と作る、惟狂も、克く念へば、聖と

作る

國語

○民勞をれば則思ふ、思へば則善心生ま、逸をれば則淫を、淫をれば則善を忘る、

孔子

○學て思ひざまば則罔し、思ふて學ばざれば則殆し、

上文 集註

○心ふ求めず、故ふ昏ふして得

ること無し、其の事を習はず、故ふ危ふして、安ららず、

同上

○學ひ、其の事を習ふ所以、思ひ、其の理を求むる所以、

孟子

○心の官ひ、則思ふ、思へば則之れを得、思ひざれば則得ず、

上文 朱註

○心ひ、則能く思ふ、而して思ふ

を以て職とを、凡事物の來る心  
 其の職を得れば則其の理を得  
 て、而して物蔽ふこと能はず、其  
 の職を失へば、則其の理を得ざ  
 して、物來て之を蔽ふ、  
 ○思ふに、聖功の本ふして、吉凶  
 の機なり、

周子

同上  
 ○思ひざれば、則微に通ざるこ  
 と能はず、  
 ○學に思ひふ原く、  
 ○深思せざれば、則其の道に造  
 ること能はず、  
 ○何を以て慾を窒らん、曰はく、  
 思ふのこ、學に思ふより、貴きい

程子

同上

同上

莫

同上

○悪を爲るの人、思ふことを知らざる、小原く、思ふこと有れば、則心悟る。

第五章 虚受

朱子

○學問の道、敢自是とせず、虚うして、人小受くれば、則自得るこ

と有り

同上

○虚心順理、學者當さ小此の四字を守るべし。

呂氏

○學の初め、先つ心を虚うし、氣を下まことを要ま、方小能く、天下の善を受く、若し氣高ふれば、則學を爲る工夫と相背く。

李氏

○學を爲るの道、常に卑遜ふて、自下るを以て心と爲し、能を以て、不能ふ問ひ、多きを以て、寡きふ問ひ、有れども無きふ若く、實れども虚きふ若くを、遜るの謂ひあり、

山真西

○學を爲るの要ハ、惟志を遜り、

時ふ敏をるふ在り、志を遜るとハ、斯の心を卑遜して、有りと雖、未ぶ嘗有らざるが如くをるあり、時に敏をるとハ、進修時ふ及んで、日に新にして、又新に在るなり、凡人の學ふ害ある者ハ、驕と怠との二、驕れば則志盈ち、善

易乾  
九三

八る可ららむ、怠れば則志惰て、  
 功進む可らず、遜れば則驕ら  
 む、敏ければ則怠らず、修る所の  
 道、自將さふ源々として來るこ  
 と、井の泉の愈汲て愈有るが如  
 し。

○君子、終日乾々として、夕へに

國語

說苑

惕若しり、厲けれども咎死し、  
 ○士、朝ふして業を受け、晝に  
 て講貫し、夜ふして過ちを計り、  
 憾無くして、而して後安まふ即  
 く、

○常ふ爲して置らず、常に行つ  
 て休まざる者、故ふ及び難し、

張子

○言教あり動法あり晝爲さこ  
と有り宵得ること有り息養ふ  
こと有り瞬存すること有り

靖尹和

○學の切に間斷を忌む、便是れ  
學ふ阿らず

朱子

○學の時に習ふを貴ぶ、須く是  
れ心心念念上ふ在るべし

同上

○一事として、學ばさること無  
く、一時として、學ばさること無

同上

○此の道、是れ小事ふあらず、須  
く、この辛苦を喫まべくして、方  
ふ望む可し

同上

○一念存せざれば也、是れ間斷

黃勉齋

一事差あるも也、是れ間斷、  
○必眞實の心地、刻苦の工夫有  
りて、而後可あり、

第六章 日新 變日

朱子

○學を爲さふは、須く今は是ふ  
して、昨は非あることを覺ふべ  
し、日小改め、月小化して、便是れ

長進也、

同上

○一日一日の効を見るべし、一  
月一月の効を見るべし、

尚書

○吉人の善を爲る、惟れ日も足  
らぬ、凶人の不善を爲る、亦惟日  
も足らず、

陶侃

○大禹ハ聖人、乃寸陰を惜む、衆



人小至てい、當さ小分陰を惜むべし、豈逸遊荒醉を可んや、生きて時小益無く、死して後小聞ふること無き、是れ自棄也、

顏之推

朱子

○光陰惜む可し、逝水に譬ふ、  
○大抵、家務冗幹既多し、此れ已む可らざるもの、若し其の餘

時に於きて、又急からざる雑務を以て、虚く光陰を費さ、則是れ終小書を讀む小時無し、

第七章 治性

舜典

○直ふして温、寛ふして栗、剛ふして虐、老ること無し、簡ふして傲ること無し、

○性を治むるの道ハ、必已る餘り有る所を審ふして、而して其の足らざる所を強む、蓋聰明疏通ある者ハ、太察を戒め、寡聞少見ある者ハ、壅蔽を戒め、勇猛剛強ある者ハ、太暴を戒め、仁愛溫良ある者ハ、無斷を戒め、湛靜安

舒ある者ハ、時小後ることを戒め、廣心浩大ある者ハ、遺忘を戒む、必已る戒むべき所を審ふして、而して之れを齊ふる小義を以てす。

○西門豹、性急なり、故小韋を佩びて以て已を緩うを、董安于、心

緩かり、故小弦を佩びて、以て自  
急小す

第八章 上達

孔子

○天を怨みず、人を尤めず、下學  
して上達を、我れを知る者、其  
れ天の

上文  
集註

○天を得て、天を怨みず、人

小合はずして、人を尤めず、但下  
學を知て、自然上達を、此但自  
其の已小、反て自修め、序小循て  
漸く進むことを言ふのと

程子

○學者須く下學上達の語を守  
るべし、乃學の要、蓋凡そ下人事  
を學べし、便是れ上天理小達を

標以隆伯夏言言言 卷之五 金港堂

然れども、習ふて察せざれば、則  
亦以て上達するること能はず、

第九章 執中 敬義

大禹 謨

○人心惟危、道心惟微、  
惟精惟一、允厥中、  
執中、

朱子

○敬以直内、義以方外、  
八箇の字、

孔子

一生之れを用れども窮らず、

○君子は、敬いざること、  
身を敬まるを、大かりと  
し、身は親の枝あり、  
敢て敬せざらんや、  
其の身を敬まること、  
能いざるは、是れ其の親  
を傷ふあり、其の親を  
傷ふは、是れ其の本を傷  
ふあり、

新編 朱子 用書 卷之五 六

曲禮

り、其の本を傷へば、枝從て去ぶ。  
○敬せざることを母れ、儼として  
思ふる若く、辭を安定ふせよ。民  
を安せんをな。

荀子

○凡百事の成るや、必之れを敬  
むふ在り、其の敗るや、必之れ  
を慢るふ在り、故ふ敬怠ふ勝て

程子

朱子

同上

い則吉く、怠敬に勝てい則滅ぶ。  
○敬は、百邪ふ勝つ。  
○敬の一字は、萬善の根本、涵養、  
省察、格物、致知、種種の功夫、皆此  
れより出づ。

○敬の一字は、聖學の始めを成  
し、終りを成む所以の者あり。

同上

○凡事須く是れ敬をべし、則能く立つ、纔ふ慢心有れば、事日小弊壞ふ趨る。

同上

○拘迫なれば、則敬ふ非む、悠緩なれば、則敬ふ非ず。

第十章 仁義

孔子

○夫れ仁者い、已立んと欲して、

同上

人を立つ、已達せんと欲して、人を達せ、能く近く取て、譬るを仁の方と謂ふ可きのみ。

○君子い、食を終るの間も、仁ふ違ふこと無し、造次ふも、必是小於てし、顛沛ふも、必是小於てし。

同上

○我未仁を好む者、不仁を惡む

者を見む、仁を好む者、以て之れ小尚ふることなく、不仁を惡む者、其れ仁を爲さず、不仁者を以て、其の身小加へず、能く一日其の力を仁小用ふること有らん、我れ未力の足らざる者を見ず、蓋之れ有らん、我れ未之

論語

れを見ず

○顔淵仁を問ふ、子曰、克己復禮を仁と爲さ、一日己小克ち、禮小復れ、天下仁小歸さ、仁を爲ること、己小由れり、而して人小由らん也、顔淵の曰、いく、其の目を請ひ問ふ、子曰、いく、非禮視るこ

と勿れ非禮聽くこと勿れ非禮  
言ふこと勿れ非禮動くこと勿  
れ顔淵曰いく回不敏と雖請ふ  
斯の語を事とせん

謝氏

○已小克つひ須く性偏ふして  
克ち難き處より、克ち將て去る  
べし、

朱子

○古人の學を爲る、大率自家の  
病痛を體察し、上面小就きて、克  
治して將ち去る、

同上

○克己固小是れ學者の急務、

同上

○克己亦別小巧法無し、譬へば、  
孤軍の粹小強敵小遇ふが如し、  
只力を盡し、己を捨て、前小向

朱子全集卷之三十一 學問



ふことを得るのと尚ほ何を問  
問はんや

山真曲

○克己復禮ハ、仁の體あり、人を  
愛し物を利するハ、仁の用あり、  
必是の體有て、然後其の用行は  
る、故小聖人仁を論ずること己  
小克つより先きあるハ莫し、

論語

○仲弓仁を問ふ、子曰いく、門を  
出づれば、大賓を見るが如くし、  
民を使ふことハ、大祭小承の如  
く、己の欲せざる所人小施す  
こと勿れ、

朱子

○敬以て己を持ち、恕以て物小  
及せば、則私意容る所無くして、

孟子

心徳全し、

○仁い人の心なり、義い人の路あり、其の路を捨て、由らむ、其の心を放て、求むることを知らず、哀ひるな人、雞犬放ること有れば、則之れを求むることを知る、放心有りて、求むることを知

程子

らむ、學問の道他無し、其の放心を求むるのこゝ

○聖賢千言萬語、只是れ人已ふ放つの心を將て、之れを約めて、反復して、身ふ入れ來らしめんことを欲む、自能く尋て上に向ひ去るは、下學して上達するな

横山先生遺言 卷之五 金澤堂

朱子

り、  
○ 聖賢千言萬語、只人の其の本心を、失いざらんことを要す、

程子

○ 心ハ、腔子の裏ふ在んことを要す、

朱子

○ 敬をれば、便腔子の裏ふ在り、

孟子

○ 惻隱の心ハ、仁の端あり、羞惡

同上

の心ハ、義の端あり、辭讓の心ハ、禮の端あり、是非の心ハ、知の端あり

○ 凡我れ不四端有る者、皆擴めて、之れを充ることを知らば、火の始て然へ、泉の始て達するが若くあらん、苟能く之れを充て

新編 孟子 卷之五 五十一 孟子 卷之五

ハ、以て四海を保つふ足り、苟之  
れを充てむんば、以て父母小事  
ふるふ足らむ。

朱子

○此の心の量、本以て天地を包  
括し、萬物を兼利するふ足れり、  
只是れ、人自其の量を充滿する  
こと能はむ、推し去らざる所以

あり

姜潭書

新小學修身誦讀書五 終

明治十六年二月八日版權免許

金澤堂

明治十六年二月八日版權免許  
同年七月出版

定價金九錢

高知縣平民

編者 木戶 麟

福岡縣下筑前國那珂郡  
春吉村七百七十番地

東京府士族

出版人 原亮三郎

東京日本橋區本町三丁目  
十七番地